

沈從文『辺城』論（三）

黄 媛玲
HUANG Ailing

六 竹林と翠翠

汪曾祺は、沈從文の『辺城』を論じたとき、「沈從文は彫刻家ではなく、彼は画家である。風景画の巨匠だ。彼が描くのは、油絵ではなく、すっきりとした筆致の、明るい色遣いの中国の彩墨画だ。」と言い、『辺城』の舞台茶峒の城外を流れる「酉水」の描写を例に引いて、

那條河水便是歷史上知名的酉水，新名字叫作白河。白河到辰州與阮水匯流後，便略顯渾濁，有出山泉水的意思。若溯流而上，則三丈五丈的深潭皆清澈見底。深潭中為白日所映照，河底小小白石子，有花紋的瑪瑙石子，全看得明明白白。水中游魚來去，皆如浮在空氣裏。兩岸多高山，山中多可以造紙的細竹，長年作深翠顏色，迫人眼目。

この河こそ歴史上で有名なかの酉水であって、新しい名前では、白河と呼ばれている。白河が辰州で沅水と合流して後、いくらか混濁を呈して来るところは、山を出た泉といった感がある。若しも流れを遡って行くなれば、三丈なり五丈なりの深い淵でもきれいに澄み切って底が見える。深い淵の太陽に照りつけられている部分は、河底の小さな白い石や模様のある

瑪瑙石まではっきりと見られる。水中を泳ぎまわっている魚が、まるで空気の中に浮かんでいるかのようなようである。兩岸には高山が多く、山中には紙の原料となる細竹が生い茂って、一年じゅう目に染みるばかりの濃い翠をしている。¹

「風景描写については、中国文学には非常に長い伝統がある。晋代と南朝の宋代に山水詩が形成され、呉均の「與朱元思書」は江南の風景を描写した名作だ。柳宗元の「永州八記」、蘇東坡、王安石の数々の紀行文、明代の袁氏兄弟、張岱といった風景描写の名手たちは、いずれも沈從文に啓発を与えたはずだ。中でも沈先生が最も敬服していたのは、私の知る限り、それは、酈道元の『水経注』だった。」²と解説した。

試しに、具体名が挙がっている呉均の「與朱元思書」³と柳宗元が永州（今の湖南省零陵県）の山水を記した「鉅鉤潭記」「至小丘西小石潭記」⁴を沈從文のこの文章と並べてみよう。

呉均「與朱元思書」

風煙俱淨，天山共色。從流飄蕩，任意東西。自富陽至桐廬，一百許里，奇山異水，天下獨絕。水皆漂碧，千丈見底。游魚細石，直視無礙。急湍甚箭，猛浪若奔。夾岸高山，皆生寒樹。……

柳宗元「鉅鉤潭記」

鉅鉤潭，在西山西。其始蓋冉水自南奔注，抵山石，屈折東流，……

柳宗元「至小丘西小石潭記」

從小丘西行百二十步，隔篁竹聞水聲，如鳴珮環，……下見小潭，水尤清冽，全石以為底，……潭中魚可百許頭，皆若空遊無所依，日光下澈，影布石上，……

該博な中国古典文学教養の持ち主ゆえに汪曾祺の見通せる『辺城』の水底の深さは測り知ることができないが、沈從文の流麗な文体の源流を見事に示している。「酉水」の描写のみならず、『辺城』の書き出しで茶峒の場所を示す描写も同じ筆法である。

小溪流下去，繞山岨流，約三里便匯入茶峒大河，人若過溪越小山走去，則只一里路就到了茶峒城邊。溪流如弓背，山路如弓弦，故遠近有了小小差異。小溪寬約廿丈，河牀為大片石頭作成。靜靜的河水即或深到一篙不能落底，卻依然清澈透明，河中游魚來去皆可以計數。

谷川は、險岨な山間をめぐって流れ、三里ほどして茶峒の大河に注ぎ込む。人が若しも谷川を渡り小さな山を越えて、ものの一里も行けば茶峒の町に着く。谷川の流れが弓の背だとすれば、山路は弓の弦にあたる。だから路の遠近に僅かながら相違がある。谷川の川幅はほぼ二百尺、河床は大きな一枚岩から成っている。静かな河の水は棹が底にとどかないような深いところでも、すっきりと澄み切っていて、河の中に泳いでいる魚の数さえ読みとれるほどである。⁵

また、沈從文の別の短篇「三三」における楊家の水車小屋を取り巻く地理的環境の描写や、『從文自伝』にもそのまま引用された中篇小説「鳳子」における故郷の自然環境の描写も、これらの古典詩文と同じく、韻律を感じさせる流暢さと、水の流れを取り入れた地勢の説明によって、視覚に訴える鮮明なイメージを作り出している。変化に富んだ文章構造と作者の清澄なまなざしが感じられる点では、柳宗元の文に近い。

さらに様々な古典を通して、私たちは、沈從文が『辺城』の舞台背景に竹林を配した意義と、美しい故郷に対する深い愛情を一層理解できるのである。

たとえば、沈從文が「鳳子」の中で故郷鳳凰の位置を示すのに、「屈原の跡を慕って揚子江を遡り、とこしえに澄み渡った沅水に沿って上流に向かう」⁶という表現を使っている。故郷を語るとき、彼は中国文学の古い源である『楚辞』の「渡江」をまず意識したのであろう。

乘船余上沅兮，齊吳榜以擊汰。船容與而不進兮，淹回水而疑滯。朝發枉渚兮，夕宿辰陽。⁷

蓬船に乗って沅江をさかのぼり、櫂をそろえて波をうつ。船はゆるゆるとして進まず、渦巻く水にとめられてしばし滞る。朝枉渚を立ちいでて、夕に辰陽に宿る。⁸

枉渚(今の湖南常德)から辰陽(今の辰谿)までの屈原の船旅は、沈從文が14歳から20歳まで、故郷を離れて6年間の放浪・兵隊生活で往き来した水上の道と一致する。沈從文がもっとも感服したという『水経注』では、河の流れは水源から下流へと記述されているので、屈原の旅とは逆方向ではあるが、該当する場所には次のような風景が描かれている。⁹

沅水又東，歷小灣，謂之枉渚，渚東里許，便得枉人山，山西帶修溪，一百余里，茂竹便娟，披溪蔭渚。

沅水はさらに東に流れて、枉渚という小さく湾曲した中洲を通る。枉渚から東へ一里ほどに枉人山があり、山の西側を修溪がめぐる。百里余りにわたって竹が生い茂り、たおやかで美しく溪流の上を覆い中洲に蔭を作る。

これは、常德の西の風景である。

沅水又東，歷臨沅縣西，為明月池白璧灣，灣狀半月，清潭鏡澈，上則風籟空傳，下則泉響不斷，行者莫不擁楫嬉遊，徘徊愛玩。沅水又東，歷三石澗，鼎足均峙，秀若削成，其側茂竹便娟致可玩也。

沅水はさらに東に流れ、臨沅縣の西を通ると、名月池・白璧湾となる。湾は半月形で、澄み切った淵は鏡のように透明である。上は風の音楽が空から伝わり、下は泉水の響きが絶え間ない。旅行者はみな櫂を抱えて遊び、辺りを行ったり来たりして景色を楽しむ。沅水がさらに東に流れると、三石澗を通る。鼎の足のように岩が均等な間隔でそば立ち、削ったかのよう

に精巧で美しい。その傍を竹が生い茂り、たおやかで美しく目を楽しませる。

これは桃源の西に当たる。屈原はさらに沅水を遡り、淑浦という所で陸に上がるが、鳳凰は、辰谿で沅水に注ぐ辰水を西へ遡っていく所に位置する。『水経注』では、この辺りのことを次のように述べている。

辰水又右會沅水，名之為辰溪口，武陵有五溪，謂雄溪、楠溪、無溪、酉溪，辰溪其一焉，夾溪悉是蠻左所居，故謂此蠻五溪蠻也。

辰水、酉水を含むこの武陵山地を流れる五つの溪流の兩岸には蛮人が住んでいる。そのため、ここの蛮人は五溪蛮と呼ばれる。漢代では漢人が蛮人征伐にやってきた。かの有名な武将馬援は、『辺城』にも言及されている沅水の難所青浪灘に程近い壺頭山の山中で疫病に罹って没した、という記述が同じ『水経注』巻三十七に見える。辰水、酉水に関する詳しい記述はないが、その近くの沅水の畔には2か所も特筆すべき美しい竹林があった。「便娟」という、女性的でしなやかに揺れるイメージの形容を使っている。『水経注』に呼応するかのよう、竹林は、湘西の美しい風景の代表として、『辺城』にはぜひとも配する必要があるがあった。

もう一つ、周作人『苦竹雜記』「小引」（1935年6月作）¹⁰に引く『冬心先生画竹題記』もまた『辺城』の竹林の設定を理解する助けになる。『苦竹雜記』の序に当たるこの文章が書かれたのは、『辺城』の刊行後で、『辺城』を高く評価した周作人だが、彼が連想する竹林は、陰影に満ちたものだった。

酈道元注《水經》，山陰縣有苦竹里，里中生竹，竹多繁冗不可芟，豈其幽翳殄瘵，若斯民之餒也夫。山陰比日凋瘵，吾友舒明府瞻為是邑長，宜憫其凶而施其灌溉焉。予畫此幅，冷冷清清，付渡江人寄與之。霜苞雪翠，觸目興感為何如也。¹¹

酈道元の『水経注』には、山陰県に苦竹里あるとある。その里は竹が生えはびこり、刈り取るのもできないほどだ。その暗く翳り病み衰えているのは、その民が飢えて気力がないせいだ。山陰県は日に日に疲弊しているので、その里の長となった我が友人の舒瞻は、凶作を憐れみ、灌漑事業を実行している。私は、このひんやりひっそりとした竹の絵を描き、河を渡る人に托して彼に送ろうと思う。霜がおいた花の蕾みと雪を被った翠の竹を目にしたら、どのような感興を持たれるのであろうか。

ここには引用しなかったが、柳宗元「永州八記」にも金農（冬心先生）のこの文章にも、土地の貧しい人々に対する憐憫の情がしみじみと書かれている。『辺城』の穏やかな風景の奥にもそのような情が秘められているのかもしれない。もともと、竹は空洞と節を持っていることから、「虚心」（公平無私の心）「有節」（かたく操を守る）という意味に通じ、美德の象徴となっている。絵画にも関心があつた沈從文は、金農のユーモアあふれる題画記を愛読したに違いない。その証拠に、「鳳子・八 在栗林中」（『文藝月刊』1932年6月30日発表）の中に、「竹に心がない」という表現が歌の文句に使われ、これは、金農題画記の中の作詩から取った可能性がある。

“一枝新長楚江頭，便有煙昏細雨愁。若說無心心最苦，斑斑湘女暮啼秋”
此予二十年前題湘陰女子畫竹詩也。¹²

「楚の河の畔に竹が一本新しく生えると、たちまち霧雨が降り愁いを誘う。心がないと言われる竹なのだが、本当は心が苦しい。湘竹の斑点は秋の夕暮れに舜の死を悼んだ二人の姫の涙の痕。」これは私が20年前に湘江の北に住む女性が描いた竹の絵に題した詩である。

本来、「無心」は虚心という良い意味で解釈されるが、金農も沈從文も「情がない」という意味で茶化している。

しかし、金農は「吾性愛竹，愛其凌霜傲雪，無朝華夕瘁之態」（私が竹を好むのは、竹が雪や霜にも負けないし、朝に華やぎ夕に萎えるといった態を見

せないからだ)と言い、つまり、竹の強さに惹かれるという。そして、竹の姿は、「不夭闕，不籠鐘，亭亭特立，若翠葆玉人」¹³（縮こまらないし、年老いて疲れている感じがしない。しゃんとして立つその姿は、みずみずしい美人のようだ）と評価する。『辺城』の人物に託した沈從文の思いをここに見ることができ、また竹の姿は少女翠翠の姿を連想させる。

このように、沈從文は古典を踏まえ、竹に関するイメージを風景に溶け込ませているが、彼は過去への郷愁のみで『辺城』を書いているわけではない。つぎに、竹林をヒントに中国現代文学史の文脈で沈從文が『辺城』の翠翠を創造するまでの道程を辿ってみよう。

『辺城』は沈從文の別の作品「三三」（1931年9月刊行）を拡大したものであるという劉西渭（李健吾）の指摘を沈從文も正しいと認めている¹⁴が、しかし、そこにとどまらず、『辺城』物語の源流を遡る必要がある。「三三」という名前は、沈從文が北京の文壇に登場したばかりの頃に発表された廢名（馮文炳）の「竹林的故事」¹⁵（1925年2月）の「三姑娘」から取ったものであり、『辺城』は「竹林的故事」の延長線上にあるものとも言える。「竹林的故事」の書き出しと『辺城』の書き出しの風景も似ている。

出城一條河，過河西走，壩腳下有一簇竹林，竹林裏露出一重茅屋，茅屋兩邊都是菜園，十二年前，他們的主人是一個很和氣的漢子，大家呼他老程。

畑仕事と魚取りで生計を立てていた程おじさんは、四十歳の妻と八歳の娘「三姑娘」を遺して死んでしまう。廢名の作品には「寡婦と孤児（父親をなくした子）」が主人公となることが多いが、それは、中国の農村の状況の反映であるとも言えるので、沈從文の「三三」も同じ設定である。しかし、「竹林的故事」の中の「寡婦と孤児」は、勤勉に働いて畑で取れたもので生活を築き、「父親がいたことさえ忘れるほど」しっかりと自立できている。「三三」の中の「寡婦」はよく働くが、所有の水車小屋は人も羨む資産である。二つの作品とも土地に密着した農村の強みを暗示している。

「竹林の故事」の「三姑娘」は、城内の「賽龍燈」の祭りに出かけるように母親から催促されても、若い男女がひしめき合う祭りを嫌い、家に留まって働くことを選ぶ。

三姑娘不上街看燈，然而當年背在爸爸的背上，是看過了多次的，所以聽了敲在城裏響在城外的鑼鼓，都能夠在記憶中畫出是怎樣的情境來。「再是上東門，再是在衙門口領賞，……」忖着聲音所來的地方，自言自語的這樣猜。

城内の祭りの銅鑼と太鼓の音が家の中に聞こえて来ても、「三姑娘」は、子供の頃に父親に連れられて見物に出かけたことを回想するだけで祭りに出かけているような楽しい気持ちになる。この場面を沈從文は、茶峒城内へ買い物に出かけたお祖父ちゃんの居場所を想像する翠翠に重ねて、『辺城』に取り入れている。しかし、「三姑娘」と違って、翠翠は、端午の節句の太鼓の音を聞きつけると犬と同じようにはしゃぎ出す。おじいちゃんと一緒になら城内の龍船競走のお祭りに出かける気持ちである。そこには、幼い彼女自身さえも意識していない男性への憧れの心の芽生えがあるからである。

「三姑娘」が余りにも親思いでおとなしく、男性との出逢いを拒むので嫁に行かないのではと母親は心配する。器量よしで働き者、気前のよい「三姑娘」に、周りの人たちが「将来良い旦那さまに出逢えますように」という言葉をかけると、「三姑娘」はすぐさま逃げ出してしまう。年頃の娘のはにかむ姿、親の問いかけにただうつむいて無言を通す「三姑娘」の姿もまた翠翠の姿と重なる。

五四運動以降、親が主導する中国の伝統的婚姻制度を否定し、女性の自立・解放の思想の支持を得て、貞節を重んじる伝統に異を唱える性に関する新しい道徳観と自由恋愛に関する議論が知識分子の間で盛んになり、文学においてもそれに呼応するものが多い。沈從文は自由意志の尊重の点では離婚の自由、恋愛の自由を否定しないが、医学の進歩に伴い産児制限が可能になったのを背景に「近代的」恋愛を標榜する論者たちが、自由恋愛を経ずして親の

言うままに結婚する女性を奴隷呼ばわりする論調には与しなかった。童養媳を主人公にした「蕭蕭」(1930年1月刊行)は沈従文の代表作の一つとしてつとに有名だが、「近代的恋愛」の観点からこの作品を解釈する向きが多く、奴隷的売買婚のもと愛と性を抑圧された女性として「蕭蕭」をとらえる¹⁶。しかし、「愛」とは何かということも知らない少女が「性」を強調する男に利用されたことに目を向ける人は少ない。つまり、「精神と肉体の一致」を「近代的恋愛」の核心と称するが、心の成長と身体的成長とは必ずしも一致しないところに悲劇が生じるのである。「蕭蕭」同様、『辺城』の翠翠についても同じように描かれている。『辺城』のおじいちゃんは翠翠の意志を尊重したいが、「愛」とは何かをまだ理解できない少女は意思表示を拒む。彼女の「女」性としての外見に惹かれて結婚を申し込んでも返事がもらえない大老は失意のうちに河に落ちて命を落とす。翠翠を託すべき相手と話が見つからないうちに おじいちゃんは死んでしまう。

『辺城』を論じるとき、沈従文が『婦女雑誌』¹⁷に載せた「一個女人」(1930年9月刊行、第16巻9号)という一篇は見逃すことができない。「一個女人」は三翠という童養媳の物語で、作中で翠翠と呼ばれることもある。この作品は、タイトルからでも内容の相似の点からでも、同じ『婦女雑誌』第10巻8号(1924年8月)に載った小泉八雲の「一個女人的日記」と呼応している。

小泉八雲の「一個女人的日記」(「或女の日記」)¹⁸は、東京に住むある下層社会の婦人が遺した日記を忠実に英文に訳したものであるという。日記は、29歳の女性が38歳の男との見合い話が上がった日から始まり、妻を亡くした男の不便さを思いやって見合いの翌日にはすぐに結婚し、仲の良い夫婦になるが、3回の出産はともに赤ん坊を死なせてしまい、ついには本人も病気になってしまったところで終わっている。明治28年から33年の間の日記としている。小泉八雲の後書きには、「この日記を読む人々はこんなに慎み深くやさしい婦人が、かくの如く不意に、その性質気分については毫も知らない全くの他人の妻になろうと熱心になった事を不思議に思うであろう。日本における大多数の結婚がここに書いてある通りの非小説的な方法で、又仲人の

力で整えられるのである。…善良なる女子は皆結婚する事に決まっている、或時期をすぎて未だ結婚しないのは本人の恥辱であり又人の指弾を受ける。」という感想を述べる一方、この伝統的な結婚制度における女性を称える言葉も惜しまなかった。

柔順なる事と義務を立派に仕遂げる事によって、愛情を得ようとの健気なるこの婦人の決心、どんな僅かの親切に対しても有する感謝の念、小児のような信仰心、この上もなき無私の念…

小泉八雲は、夫の収入から婦人とその赤ん坊の死を貧困によるものと解釈し、そして次のように述べる。

実際東京の数千の貧民はこれより一層貧しくくらし居る。…(略)…
こんな境遇にあつて子供を生んで育てて行く事は、ただ余程強壯な婦人にして始めて容易にできる。こんな境遇は田舎のもっと苦しいが、しかし、もっと強壯な農民の境遇よりもはるかに危険である。それで多数のうち弱いものは倒れて死ぬ事は想像する事ができる。

これは中国の農村で普遍的に行われる童養媳制度の意味を理解するのにも役立ち、沈從文が「一個女人」で再び童養媳を取り上げる理由もここにある。「一個女人」は三翠の童養媳としての生活を時間順に並べてその働く内容を説明的に書いていだけで、小説の要素に乏しく、「蕭蕭」のように注目されない。姑がいないため、結婚前から将来の夫と舅に仕え、家事も畑仕事もし、15歳で結婚し子どもを産み、舅が亡くなった後、農村社会の変動で安心して畑仕事ができなくなった夫が兵隊になって家に戻らなくなる。隣に住むおばさん（乾媽）に寄り添いながら子どもを育てる。そのうち、乾媽の夫である塾の先生も亡くなって、三翠は半身不随の乾媽の世話もするようになる。ほとんど希望が見えない状況が続くかと思うと、いつしか息子が成長し働けるようになり、雉狩りも畑仕事もでき、牛まで手に入れた。そして、30歳の時

には孫を抱いて他家の嫁入りを見物する。この最後のシーンが「蕭蕭」と実によく似ており、29歳にして嫁入りする東京の婦人とは対照的である。内戦が続く中国の国内状況の中で、年齢は若いが遅しく生きる「強壮な婦人」の姿を描き出している。「竹林の故事」の「三姑娘」も三翠も労働を美德としており、経済的に自立した女性である。『辺城』の翠翠は両親がいない分、幼いながらも畑仕事もしており、そして、おじいちゃんを亡くしてからは、一人で渡しの仕事をこなしている。余分に報酬をもらわない労働を喜びとしている点、新しい時代の到来を予感させる。

参考文献：

- 1 『現代中国文学全集』第八巻第12頁、河出書房、昭和29年初版、松枝茂夫訳、一部改訳
- 2 「沈從文和他的辺城」『我的老師沈從文』第55頁、大象出版社、2009年
- 3 『全上古三代秦漢三國六朝文』清嚴可均輯、全梁文卷六十、中華書局、1958年
- 4 『唐柳河東集』巻第二十九、四部備要本、台湾中華書局、1981年
- 5 『現代中国文学全集』第八巻第8頁、河出書房、昭和29年初版、松枝茂夫訳、一部改訳
- 6 『現代中国文学全集』第八巻第226頁、河出書房、昭和29年初版、立間祥介訳
- 7 傅錫壬註訳『新訳楚辭讀本』第99頁、三民書局、民国65年
- 8 『中国古典文学大系』第15巻『詩經・楚辭』第369頁、目加田誠訳、平凡社、1980年、一部改訳
- 9 『水經注』巻三十七、四部叢刊本、台湾商務印書館、1979年。『水經注圖』清楊守敬編繪、第462頁、中華書局、2009年
- 10 『苦竹雜記・小引』岳麓出版社、1987年、原載は1935年6月23日『大公報・文藝副刊』（『回望周作人・資料索引』、河南大学出版社、2004年に拠る）
- 11 金農著・閻安校注『冬心題画記』第32頁、西泠印社出版社、2008年
- 12 同上、第42頁
- 13 同上、第41、42頁
- 14 『沈從文全集』第14巻第452頁、北岳文芸出版社、2002年
- 15 『語絲』第14期、1925年2月16日、上海書店影印本、1983年
- 16 『中国女性史入門——女たちの今と昔』第30頁、沈從文の「蕭蕭」を元にした映画を例に童養媳の悲劇を述べている。関西中国女性史研究会、人文書院、2005年
- 17 『婦女雑誌』商務印書館、線装書局影印本、2006年
- 18 『小泉八雲全集』第7巻第61頁～参照、第一書房、1928年